

---

# 軽音世界のなかへ！

SORA ソラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

軽音世界のなかへ！

### 【著者名】

NO535

### 【作者名】

SORA ソラ

### 【あらすじ】

高校進学について悩む雪彩音。<sup>ゆきあやね</sup> 適当な店に入り、偶然楽器、ギターに興味をもつ。しかしどの高校にも軽音楽部についてまともに取り扱っているところがない。そこで彩音は幼なじみの部田奏太と部活をつくりあげていく。

## 「これからのお進路」（前書き）

特別な設定などないので面白いといふがないかもしませんが見守  
つてください。

## 「これから」の進路！

中学校からの帰り道。「これから」の高校を受験すればいいか考えなければならない。

「まだからの進路なんて…」

考えていると一つの大きなため息がこぼれる。

なにかしようと思つても気分が乗らない。

「とりあえずなにか店にでも行こうかな…」

私はそこらの適当な店に入つてみる。

入るとそこからはノイズのような大きな音が聴こえ、私の腰ほどまでの髪の毛が揺れたように感じた。

「…つ、痛つた！」

なんだこの音。なんでこんな大きな音が！？

びっくりして店を確認してみると、そこはなにかの楽器店。奥に進むと楽器の試奏をしている人がいた。じゃらん。と。楽

器はギター。

「わあ～。かっこいいなあ～」

思わず見入つてしまつた。楽器なんて弾けないのに。

そうやつて見ていると話しかけられてしまつた。

「おや？お嬢さん、なにか探しているのかい？」

そう、店員がきてしまつた。

「あ…、いえ私はとくになにもつ」

そう言つて急いで店を出てしまつた。「なにしてるんだろう私…」

また中学校の帰り道に戻り自分の家を求めて歩く。しかしそこで1つ浮かぶ。

「…楽器かあ～」

いいかも。

そう考えていると家が見えてきた。

急いでかけこむ。「ただいま～！」

「あら、おかえり。今日は元気ねえ、どうかしたの？」

「これから進路についてちょっとね。考えてみる」とがって。

お父さんが帰ってきたら言うね」

ちょっと調べもの、と言つてパソコンの前に座る。

「楽器 ギター……？」

検索！とクリックすると「ギター」と並ぶ楽器がいつぱい。

「つづく」こ量…」つづいてしまつ。

ストラト、レスポール…いろいろな種類が。

「……」

文章を読むのが苦手だ…。目が痛い。目を押えて床に倒れ込む。

「ただいま。……？」彩音<sup>あやね</sup>、なにしてるんだ？」

「おかえり、お父さん。ん、ちょっと楽器について調べててね」

その話にお母さんもHプロンを外し加わる。

「それで、私は高校で楽器をやりたいと思うの」

「へえ、楽器か」

あれ、反応が小さい。

「別にいいんじゃない？ 彩音がやりたいと思つたんでしょう？」

「う、うん」

びっくりだ。うちの家族なら反対すると思つたのに。

「それで楽器はなにをやるつもりなんだ？」

お父さんが一言。

「楽器は…ギターがいいかな」

お父さんの問いかけにそつ返す。

「そうか。頑張れよ」

それだけしか言わなかつた。

次の日の朝、二つも通る飽きるような直線を辿り、学校に向かう。いつもおはよ。といつ声が聞こえないぐらい賑やかなクラスに入る。

だがいつも私のおはよに気付く人がいる。

「お、あや。おはよう」

今日も気付いた。幼なじみの部田奏太。そつた。髪は長くもなく短くもな

く。

なにかと運動などをするとときは前髪を後ろに持つてこくのが特徴かな。

苗字はぶた。…ではない。

部田（とりた）だ。だれでも一回は間違えるだろ？

「奏太は進路…決めた？」

「進路？いや、内緒だ」そう返してきた。

んむむ、なんで内緒。

「内緒つてなによ、なにか変なことじょつと考えてる？」「いやぜーんぜん」

えー。教えてくれてもいいじゃない。

と言おうとしたときに朝のホームルームのチャイムが鳴る。

「じゃああや、また空いてる時間にまた」

そう言って奏太も人の流れについて席につく。

先生が「みんなおはよう。まだ進路について悩んでる人もいるみたいだな。そろそろ決めておけよ？」

この時期のホームルームはもう進路のことにしか触れない。

まだ、以前の私のように決まってない人が半数ほどいるからだ。

しかし、昨日まで焦っていた私はもう先生の話を聞き流している。

「雪！聞いているのか？お前は決まったのか？」

突然先生の一喝。

「え？あ、はい！」反射で返事を返す。

「そうか、後で職員室で聞かせてくれ。ではホームルームもここまでだ」

先生が教室を出していく。

静まり返っていた教室がまた賑やかな教室に戻っていく。

「はあー、びっくりしたあー」

一息つく。

「でも彩音がもう進路をきめてたのはびっくりだな」「私の友達で薬袋葵<sup>あかね</sup>。髪は片方を縛つていて少し短め。苗字はくすりぶくろでなくやくぶくろでもない。

薬袋でない、だ。

なにかと私の友達には珍しい苗字が多い。…私の雪<sup>ゆき</sup>、とこう苗字も珍しいのかもしれないけど。

「昨日進路決めたんだ。高校に行つて楽器をやつてみよつと想<sup>おも</sup>つの」「へえー楽器があ。でも彩音、楽器弾けたつける?」「葵<sup>あかね</sup>がからかうように言<sup>い</sup>つ。

うつ…的確なところを突いてくる…

「弾けないけど…がんばればできるんじゃないかな!」「ピアノやリコーダーができなかつたのに?」

「い、今まで真面目<sup>まめに</sup>にやつてなかつただけだもん」苦しくなつてくる。

「でも楽器つて高いじゃん。どうするの?」

あつ…すつかり忘れてた。

「親に頼んでみる」

そこで授業開始のチャイム。最近は自習<sup>じしゅ</sup>が多いので6時間、適当に流す。

よつやく放課後。先生にも昨日親に話したことを回<sup>まわ</sup>りつに話すと「だがこの辺に楽器に真剣に打ち込んでくる高校はなこぞ。」

……………。え。一蹴された。

「とつあえず、他の進路も考えておくんだ。わかつたな、雪<sup>ゆき</sup>」「…はい」

職員室を出る。そこで奏太に会つた。

「ちょっと聞こえたけど楽器やるのか。なら、俺と同じ高校行つて部活作つてやらない?」

「…いいけど。私がなんの楽器やるのかわかつてゐ?」

「いや?全く知らん」

おこ。それで誘わないでほしい。

「ギターを弾いて頑張ってみるんだ」  
彩音が言つ。

「なら俺もギターをやるかな」  
奏太からはそう返つてきた。  
「これなら同じ部活、軽音楽部を作れるな」  
「ふつ。なにそれ。でもそれいいかも」  
あははと笑いかえす。  
「じゃあ決まりだな」  
だけど実際のところまだ進路も決まってなく彩音の話が聞こえて楽器もいこかも。  
…と。やつこつとひこつ。

## 「これからのお進路」（後書き）

初めての作品です。文章の流れ、話が飛んでるところがあったと思  
いますが読んで頂きありがとうございました。

## 楽器のためJ-（龍書き）

続編です。2話目に入ります。飽きてしまったらグラウザを閉じちゃってください。

楽器のために！

「さて、これからどうすりか

「高校決め…でしょ？」

軽音部を作るにはこれから高校を決めなきゃいけない。

「そうだな。しかしあや…」

「ん？ なに？」

「あやは実力テスト何点くらいだ…？」

「… 150点くらいよ。」

は、恥ずかしい。点数聞かれたうえにこんな低い点数。

「そ、奏太は何点ぐらいなのよ」

「俺は… 350点ぐらいかな」

自分が恥ずかしすぎる。嫌になつてきた…。

しかも200点差もあるよ。

「つてことはあやとは200点差だな」「うわしかも思つてたこと言われた。

しかも笑顔…。もう嫌…。

「つてことはやつぱり私が足ひつぱつてる… よね、ごめん」「気にすんな。もともと高校はあやに任せせるつもりだから」「奏太はそれでいいの？」

「別に全然構わん」

即答。罪悪感が…。

「なら、私は高校選ばせてもらつね」と言つたものの全く決まってない。

「もつあてはあるのか？」

図星。早速聞かれるなんて…。

「まだ決めてない」

「もうか…」

「つこの空氣耐えられないよ…。なにか言葉探さないと。

「そ、そういうの近くに楽器屋があるんだけじゃ。行ってみない？」

なんとか話をそらすことができた。ふう…。

「楽器屋か。それはどこにあるんだ？」

「ちょうどこの曲がり角を道なりに行けばつづわ」

道案内をし、楽器屋に早速入る。

中に入ると昨日はいったときと同じような雰囲気があり、また大きな音が聞こえてきた。

あはは、奏太もさすがにびっくりしている。

「…つ。耳痛いなこ」

耳まで抑えちゃつてゐる。

「そう? 昨日もきたから慣れちゃつた」

それよりもギター見ない? と言葉を紡ぐ。

奏太はうなずいた。

ギター売り場に足を運ぶとそこにはたくさんのギターが。

「うわあ、いろんな形があるねー」

ギターつて最初はアコースティックみたいなのしかイメージなかつたけどこういうのもあるんだね。

知らなかつたな。

「あ! この形かっこいいつ」

「それなんてギターだ?」

「あ…店員さんに聞いてみる?」

店員さんに聞くとこれはストラトという形みたい。

「このギターはいくらくらいするんですか?」

「このストラトですか? これでしたら5万円ですね

「5、5万円…」

今のお小遣いでも後4万円は足りない…。

親に相談してみなくちゃ。

「お、俺はこれがいいかも」

「店員さん、この形は?」

「これはレスポールですね」

「へえ、これはレスポールつていうんだ。

つてこれすゞく重い。ストラトが軽いだけなのかな……？」

「これはいくらぐらいするんですか？」

奏太が聞いてみる。

また店員さんは5万円。と答えた。

くすつ。奏太も、うつ……高い……って顔してる。

「うつ……高い……」

ほら言つた。

「あなたがたはギターは初めてみたいですね。ではピックは存知ですか？」

「「ピック？」」

あ、はもつた。

「ピックはギターを弾くときに使うものですよ

ピックでしたら100円で買えますよ、と。

「奏太、ピック。買つてみる？」

「ああ。今はとてもじやないがギターなんて買えないしな」

私は大きめのピックを、奏太は小さめのピックを買つた。

「とりあえず……親に相談してみるしかないわね」

「そうだな、じやあまた明日な」

「ええ。また明日」

楽器屋で分かれてそれぞれ家に向かつ。

「ただいまー」

「彩音、おかえり」

よし。お父さんはいるみたい。交渉してみよつ。

「それで相談があるんだけど……」

「なんだ？」

「私、ギター弾きたいって言つたじゃん。それでギターが欲しいんだけど……5万円もするんだよね」

「5万円か。彩音、今いくらある？」

「い、1万円ぐらい」

友達と遊んだりして使っちゃったお金がすぐ惜しくなつてきちゃつた。

なんかくだらない」と使つてた氣がするなあ……。

「そうか。ギターは…そつだな。次の実力テストで250点を越えたらいいだろう」

え。250点…。今の私の100点上。しかも次の実力テストつてもう2週間後じゃん。

「250点ー?」

「そうだ。彩音のがんばり次第では買つてあげるよ

無理。不可能。非条理。不合理。絶望。一私の知つてゐる言葉では表せない。

とりあえず勉強するしかないか…。

急いで2階に駆け上がつていき、抱えていた鞄から教科書、ノートを取り出す。

私の苦手な文系の科目…国語、社会は捨てよう。うん。頭痛くなつちやう…。

「とりあえず数学からやつてみようかな…」

教科書を開いて、ノートに数字や記号を[写]していく、問題を解く作業に移る。

「えつと… $2 \times$ の二乗をして…」

答えを出してみると  $x = 3$  になつた。

答えを見てみると  $x = 6$ 。

「……はあ

「やつぱできつこないよ。

明日奏太に勉強教えてもらえるよつに頼むしかないかな…。そのままやつぱり勉強などできずに寝てしまつた。

次の日。朝、偶然登校中に奏太と会つた。

「おはよう、奏太」

「ん、おはよう、あや」

朝、いつもと変わらない挨拶を交わす。

「奏太は楽器のこと…親に相談してみた?」

おそるおそる聞いてみる。

「聞いたよ。別に買つてもいいって」

むむ、なに。やっぱり成績が上位の方なのっていいなあ。

「あやは?」

ぎくつ。聞き返された。

「わ、私も頑張れば買えるかな」

あー。見栄はっちゃつた…。私のばか。

「そつか。じゃあギターの件に関しては大丈夫そうだな」

「そ、そうね」

下手な相槌しか返せないよ。なにしてるんだ…。会話を続けているうちにもう学校の敷地内に入つていて、教室の前まで歩いてきていた。

中に入るといつもと変わらない、賑やかな教室。

でもさつき正直に言つておけばよかつた…。おかげで勉強教えてつて言いにくくなつちゃつた。

そのまま今日もあつという間に放課後。帰りも奏太といつしょに帰り道を歩く。

「実は…昨日お父さんにさ。実力テストでいい点とらなきゃギターだめつて言われちゃつてさ」

「いい点つて何点くらいだ?」

…250点。ぼそつと言つ。いい点なのに奏太からすれば100点も下の点数。

恥ずかしくて普段の大きさで言葉に出すことができない。

「250点か」

あー、聞こえちゃつてた。

「それで勉強を教えてほしいんだ」

赤くなつた顔を隠すようにしてうつむいて言つ。

いいよ、と返事が返ってきた。  
これから私と奏太の勉強詰めの2週間が始まるんだな…。

## 楽器のためてー（後書き）

なんか進展の少ない話になっちゃった気がするんですが、できれば  
続きも見守ってほしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0053s/>

---

軽音世界のなかへ！

2011年4月4日23時40分発行